

氏名	長野 仁美
学位の種類	博士（文学）
学位記の番号	甲第25号
学位授与年月日	平成26年 3月15日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文の題目	近松世話浄瑠璃の研究
論文審査委員	主査 金田 文雄 副査 佐藤 茂樹 副査 柚木 靖史 副査 森田 雅也（関西大学教授）

論文内容の要旨

近松の世話浄瑠璃作品は二十四編存在している。その作品は元禄十六年に上演された『曾根崎心中』に始まり、享保七年の『心中宵庚申』までである。これらの作品中で近代の坪内逍遙に始まり、現代まで高い評価を受けているのが『心中天の網島』である。その根拠の一つとして研究の活発な点を挙げる。早くには、広末保氏が「うけとめるおさんの人間があつてはじめて起こる劇的な葛藤」と作品中でもたらず意義について論じられ、また重友毅氏によって「『女同士の義理』は表面の字義にのみとらわれて解せらるべきではなく、彼女らの言動の実際に即して受け取られるべきものであった。」と指摘されている。

先学の論を元に、「女同士の義理」という主題概念は様々な論が展開されてきた。これらの「女同士の義理」についての論は、当然の事であるが、『心中天の網島』の作品内の登場人物の間での関係性に基づいたものである。

しかし、『心中天の網島』以前の近松の作品を振り返ってみた時、『心中天の網島』と同様に妻を持つ男主人公が遊女との心中に到る『心中重井筒』という作品の存在を無視することはできない。この作品では勿論、「女同士の義理」という概念は存在しないが、それに近い関係性を見ることができる。そこで、近松の『心中天の網島』以前の世話浄瑠璃作品の中に「女同士の義理」の概念の原型となるようなものが存在していたのではないだろうかと考えた。

そこで近松の世話浄瑠璃作品において夫婦と女性という図式を持つ作品を挙げ、その作品から「女同士」という関係性に焦点を当てるとどのような関係性を見出せるか検討していく。

そのためには、近松が描いた女性像に迫ることが必要である。そこでまず、近松一作目の世話浄瑠璃作品である『曾根崎心中』のお初の人物像を考察し、時代浄瑠璃とは異なる世話浄瑠璃という作品の中で描かれた女性像を探る手がかりとしていきたい。また『心中二枚絵草紙』、『卯月の紅葉』といった初期の近松の世話浄瑠璃作品に着目し、お初の人物造形の趣向が用いられているかの有無について比較検討を行う。また、その過程で主人公達とその周辺の人物との関係性についても探っていく。次に近松の描く夫婦についても考えていきたい。そのために、姦通物の作品を中心に、考察を進めた。

近松の世話浄瑠璃作品二十四編中、姦通を題材にした作品は三作品存在する。そのいずれにも「意志無き姦通」が共通して描かれている。『堀川波鼓』は姦通物の三作品の中で最初に書かれた作品である。この『堀川波鼓』における夫婦とその周囲の人間関係の考察を行い姦通劇における悲劇の展開を「女同士」という観点で見ていった。この作品の主たる題材となる姦通を引き起こすお種は、作品を考察する上で欠かせない存在である。

しかし、そもそもお種が姦通に至るまでにどのような経緯があったのかを考えていくと、関係のなさそな周囲の人間もけして無関係ではないように思われる。その中でも特にお種の妹のお藤は上中下巻と常に作品中に登場している。お藤に着目する場合考察の中心となるのは彼女が大きく関わる中巻についてである。しかしお藤の行動原理がお種のためのものであるとしたら、作品冒頭で描かれている姉妹の姿についても再考する必要がある。それには、『心中二枚絵草紙』と同じく、時代浄瑠璃との関係が欠かすことのできないものである。よって時代浄瑠璃『松風村雨束帯鑑』の姉妹とお種・お藤姉妹を照らし合わせていきたい。また、この姉妹の関係が他の作品にも影響を与えている可能性についても着目したい。『堀川波鼓』における姉妹の関係は彼女の夫をめぐる対立しているかのような場面が存在し、その一人の男性と二人の女性という構図は『心中天の網島』に通じている。そこで作品における姉妹の人物造形を中心に、彼女達の抱える問題とその葛藤について言及していく。また、他の二つの姦通曲『大経師昔暦』と『鍵権三重帷子』についても、同様に女性同士の関係性が存在していないか、検討していきたい。更に姦通曲以外の作品についても、考察を進めて行く。まず『心中重井筒』について見ていきたい。『心中天の網島』と比較すると夫婦と遊女という関係性は共通しているが彼女たちの間には、通じ合う「義理」は存在していない。しかし上巻には主人公の妻による「女同士に恥じを見せ」という台詞が存在する。妻と遊女という立場が違い且つ対立する存在の間において共有することが可能な「恥」とはどのような感情から派生するものだったのだろうか。この二人の間にある「恥」という感覚については、両者の作中での立場を含めて考察していき、果たして「女同士の義理」に与えうる影響が存在したのかという疑問について考えていきたい。また、『丹波与作待夜小室節』、『山崎与次兵衛寿の門松』これらの作品も夫婦と遊女という関係が存在している。これらの作品についても、「女同士」という関係性がどのように発展したのか検討したい。

更にこれまで考察してきた「女同士」という関係性を念頭に置き、改めて「女同士の義理」が、近松のどのような意図のもと作られたのか『心中重井筒』と『心中天の網島』を比較していきたい。そこからこの概念が作品においてどのような役割を果たしていったのか、上巻では小春の視点から、中巻においては、おさんの視点から、下巻については治兵衛と小春それぞれがの観点から、どのような「義理」が派生したのかを明らかにしそれぞれの持つ「義理」の特徴をみていき、そしてその中において「女同士の義理」が作中でどのような役割を果たしたのか考察していく。

また、この両作品の比較が論じられる時は、両作品の比較は「女同士」という関係を中心にして行われてきた。そこで、『心中重井筒』の主人公徳兵衛と『心中天の網島』の主人公治兵衛を中心にして「女同士」という関係の成立について再度検討してみる。この二人は似ているが最期の場面で決定的な差が表れる。この差こそが、それぞれの作品に繋がる特性になるのではないか。主人公の人物造形を元に心中死の場面に着目し明らかにした。